

13  
2208  
29

星月夜頭晦録六編附録上

目録

○宇多源氏佐々木一統の繁茂

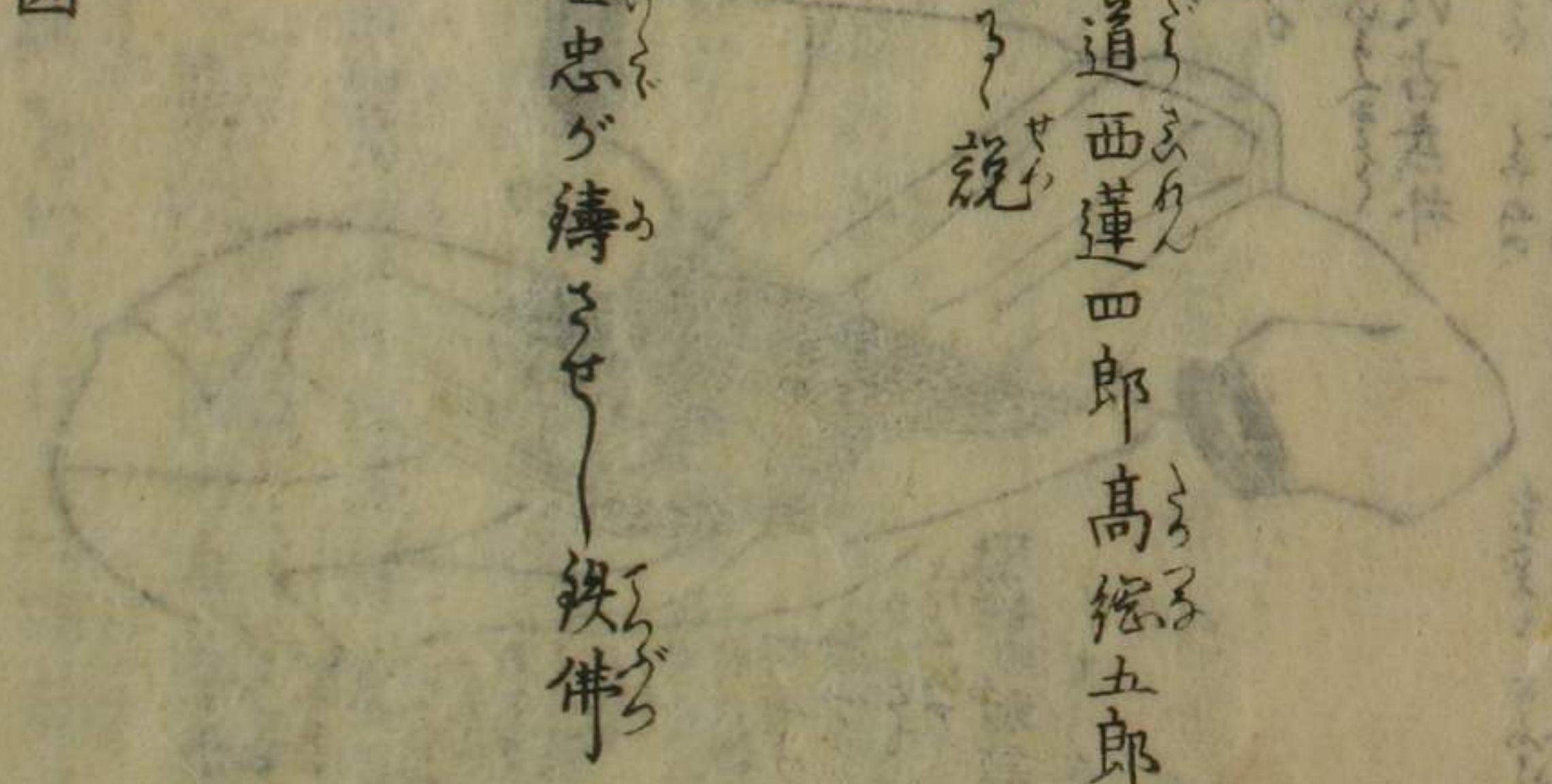
但 太郎定経次郎入道經蓮三郎入道西蓮四郎高徳五郎  
入道心願五家各嫡庶枝家に別々説

○島山源平二流の説

並 悪漢恋窪の遊君と欺く因  
武列恋窪の遊君の爲小秩父重忠が縛らせ〜鉄佛  
當時迄路傍に現在と

○実朝公風流の再話

○巴女の父兼遠を樋口今井が傳  
並 土民美仲公の亡軀を葬る因







心頼と号を是又武界の咄へあり。此兄弟五人各中門繁栄  
 するに依り。枝葉の庶流多し。ち郎定綱男子十人あり。四男  
 四郎信綱判官近江守俊平守。元に加らる。小糸春時の聳こ。  
 兼久の乱より治川先陣を勤高名叔又高綱の剣を遊り。  
 老て本佛と号し。又虚假佛と改。仁治三年。三月六十式年  
 卒し。此人の四男氏信と云。氏信の次男京極二郎備  
 信と云。是も京極の祖と云。其後大將を支持清と改。多仁  
 の元細川方に祖し。後足利多々莫太の勤勞をあり。  
 二郎盛綱次男ち郎兵衛ち郎と云。備前國児島を以て入道  
 し。西仁と稱し。七代の孫児島二郎之俊醍醐天皇の法味方

あり。備後守高徳と稱。次立依俊後二郎と云。新田中孫貞貞の  
 子也。武功を著し。義貞越前より討死。以後和列多武の  
 峯に引籠入道し。義清法師又志純法師ともよぶ。四郎  
 左衛門尉高徳次男光徳の雲別野木に在り。野木次郎左衛門尉  
 と云。是も野木の祖と云。又五郎左衛門義清入道心頼の惣領隠  
 岐信濃守泰清と云。此孫の鹽治判官高貞なり。代の庶流の  
 名字の別まこと。書き難し。格別武功の著し。ひめはら  
 繁栄あり。これに誌す。六角へ嫡家京極の庶流と云。二代三代  
 の嫡庶あり。野木木村加地隈山山城。鏡佐保伊佐山中  
 などの諸氏佐々木より出たり。

畠山源平二流の説

二篇に畠山重忠。小條時政と。稲毛重成入道が奸計に滅  
 亡の事あり。或書に重忠の後室は且利上総公義兼の後  
 妻なり。義純は生らる。年あづむ。其妻卒去。よ。同  
 頼朝々々妹姉なり。小條時政の女を後室と。且利左馬頭  
 義氏を生。是は六代の嫡流。則尊氏公之。義氏の兄義純の母  
 方の姓を稱し。畠山遠江と云。此子孫且利の家。後成たり。一  
 畠山左衛門督持國入道。徳本。其子政長。実子義就。相續  
 して。時政の時に後成。又一説あり。畠山重忠も。高望王  
 の三男。鎮守府將軍。上総公平良兼と云。出。後も。平氏

が。鎌倉草創の忠臣。衆人のその。君子なり。不倖あり。一  
 その身に一政の罪あり。小人の好悪に滅亡。家名を喪ひ  
 多れ。天下一般。又時政に替り。と。と。とも。邪智。毎。深。た。も。  
 里。同。み。せ。の。時。以。て。義。時。執。権。を。嗣。は。暨。び。内。公。蜂。蠆。の。毒  
 又。小。十。倍。を。用。て。諸。人。の。意。を。餌。ん。が。た。重。忠。が。後。室  
 女。を。養。育。し。今。ハ。フ。々。新。も。な。く。一。一。在。成。引。立。義。純。の  
 配偶。畠山の家名を嗣。した。重忠の後室。と。義純は養母  
 たり。皆。悉。く。義。時。親。牙。に。引。稟。て。取。柄。一。一。に。た。り。  
 貴。賤。お。し。別。く。名。家。の。再。良。ハ。仁。政。の。一。端。執。権。の。計

斬るそあしめと欣喜しあつて。又子等々送謀を言ふるが。又ハ  
 名家を倒しつ巴がたふし。その名家を真しつ井のまかおるは  
 諺に儉海の深は猶冽なり。人の底の探べうべんと。裁りあふ。  
 然ば島山遠にち多純より清和源氏より。子孫相伝し。嫡  
 家の阿波を國法入道道兼へ。後ハ庶流ハ左衛門督満家へ。後  
 満家が子往本入道其子家督を争ひ。政長多就く以上の二  
 元重忠の後室多兼に嫁し。多純を生と重忠の女多純を奪  
 にむるとの差あり。又云島山重忠頼朝々奥列征伐の所。後  
 一対の武列府中近江恋津といふ妙小相列。遊女のけが。近  
 所小拙いづる者。此度重忠奥列合戦。討死せしと告ぐる小女  
 此れ誠真と思ひ歎沈しが。あとかねしく。白刃を以て自ら喉吮  
 刃刺候虚くなくとも。里人いづる表りて道の傍みある墓  
 地。陸卒都婆建。並に奥列落去惣軍凱陳の節。所依  
 の諸大名の歸路。宿寄くよ。法喉を錫各本國へ引去  
 る。重忠ハ武列府中。まゝ来り。秩父へ歸らん意あり。  
 先六社へ。糸清。いづが彼花女の自害せし。巷談宣。た折  
 ちり。里人の物借を委く。内ハ甚愁傷し。近習の所。小  
 中ふく。先。寺院に金を納す。厚く供養せし。疾佛を  
 繩を縛きし。卒於婆建。一処へ居置き。後星霜を經て。  
 何者ハ疾仏に。上屋をあら。ひ往來の猿人も。礼拝して。

此れ誠真と思ひ歎沈しが。あとかねしく。白刃を以て自ら喉吮  
 刃刺候虚くなくとも。里人いづる表りて道の傍みある墓  
 地。陸卒都婆建。並に奥列落去惣軍凱陳の節。所依  
 の諸大名の歸路。宿寄くよ。法喉を錫各本國へ引去  
 る。重忠ハ武列府中。まゝ来り。秩父へ歸らん意あり。  
 先六社へ。糸清。いづが彼花女の自害せし。巷談宣。た折  
 ちり。里人の物借を委く。内ハ甚愁傷し。近習の所。小  
 中ふく。先。寺院に金を納す。厚く供養せし。疾佛を  
 繩を縛きし。卒於婆建。一処へ居置き。後星霜を經て。  
 何者ハ疾仏に。上屋をあら。ひ往來の猿人も。礼拝して。

悪漢

恋六淫の

遊君を

欺く

図



漢にきく

白真やとく

まごえぬが

まごえぬが





ところりーに往く丸打續く向子。の疾佛遙小のを吳みー  
 蕞葦の中に好並たりー。成昇平の代と有りて其所の及傍一  
 少一立並ぬ四神比名録も此次第々々々々記あり。去るも  
 今武府の人井頭六社深大寺。小金井も成守る好事也。の  
 眼前より其古代の仏經仍ありざる必成感慨どう。吾用の  
 贅言あが。畠山の因に記を蓋後可排優の所作也悪七去周  
 景清也。托君阿古屋と云りの成る合せたるは前小り。知か  
 起向成引美々。業ト儲たりりのと系法の実事の上総也  
 平忠清平相國也。仕一腹心の武士あり。相國薨びし時  
 別髪一。文治四年伊勢國より生捕は六條河原に鼻首せり。

其子上総判友忠経ハ城中祇並山より。木曾義仲と合戦の因  
 深溪又墮り。及び才上総五郎。尉忠光ハ並双の忠臣に到  
 勇の士あり。源平の戦も必死を道し。縁懐が炭を飲身し  
 際さん行ひをさ。鎌倉殿に近寄んと保し。終ゆん歌され  
 由井深也。鼻首せり。おそ才悪七。尾系法尾列。勢田に住し。盲  
 目とあり。れを日向國小到り。呀縁を授け。何れもとあり。後  
 了。可小。淨。濁。本。成。信用する族忠光の。呀。を。系。法。と。い。は。す  
 重忠が。托。君。が。系。法。が。別。一。町。古。屋。と。あ。り。府。中。辺。ハ。武。藏。林。土。の  
 草葦也。祇園清水の風流に。名。格。ひ。一。作者の。起。向。成。あ。り。成。虚  
 其。成。別。が。り。彼。托。女。重。忠。が。討。死。と。す。て。速。に。自。害。し。同。目。の。成。也。





古伝若いさる。小起第の訓之。萩のかぎ。古伝若いさる。小木の訓  
 ぢり。并いあがむ古伝若いさる。折屈の訓あり。この折屈ありは  
 そつ二ツ伝云少女代後すよし女と書い得し。このあし女と書  
 ぢり。今伝字も同じ。姫の老女を云ゆ。古伝若いさる。今伝字も  
 依りて伝字も用。今伝字の法小音も跳る。皆ほをさと訓  
 伝字。若いさる。傳の字音跳る。さるとい云す。古伝若いさる。音の跳る  
 拍らば筆も掉もさる。此の字音跳る。さるとい云す。ややく用ひ  
 傳あり。さるとい云す。成る。さるとい云す。傳言に傳られ。國字  
 格の毛紙を云ゆ。いさる。今と云す。白の相遠。さるとい云す。風伝。さるとい云す。  
 在傳をさるとい云す。但し古伝字古伝い。不字の古伝い。傳にさるとい云す。

巴女の父兼遠 兵 樋口今井が傳

変に清和源氏八幡太郎。後小鎮守府。將軍陸奥守義家  
 の惣腹六條廷尉為義惣腹。と九馬頭義朝とのひ相摸。國  
 を傳。さるとい云す。後又次郎。さるとい云す。平重隆の養子とあり。武家  
 國の住人。めく。春宮。菅刀先生。義賢。是之兄弟。うす。不和  
 かり。さるとい云す。義賢の兄。義朝。相列の所伝。を奪ひ。さるとい云す。巧  
 なる。此の云。後又重隆の兄。後又次郎。重弘。その子。重能  
 三代。月が。さるとい云す。庄司次郎。重忠。之。こ。に。義朝の惣腹。小源。太。義  
 平。こ。云。ハ。カ。砲。ま。も。強。く。無。双。の。豪。傑。あ。る。が。義。賢。が。好。む。を。惡。く。久。壽  
 二年八月十二日。伏兵。以。傳。義。賢。が。鎌。倉。長。く。さ。る。と。傳。文

相別大藏谷より、茂賢を討ちあり。是より、鎌倉君、悪源太と  
 呼ぶ。茂賢、後父庄司重能重忠のに託し、我此度上洛せし  
 跡より、茂賢の一子、豹王丸、誕生し、誅せんと欲す。敵のすまは  
 根を影紫を枯さざれば、のびりてあそびられ、重能はこころを  
 早速尋當せられども、漸二歳より愛らるる多し、殺すべし  
 忍びど懐に入り、宿所より歸し、竹とるよ死かふあんと急  
 く道より武列長井庄に住、赤藤別當、実盛、小行、遠の、強、  
 別然の中より、退るるの懐に入り、茂賢の遺紀念  
 又の外は、この児、知ることなく、後ども、よつ、おの、次、才、た  
 とふ。貴、及、竹、卒、助、多、終、らん、や、と、云、附、豹、王、丸、を、西、手、子、丸

也。実盛、小笑ひあり、其、実、豊、切、に、衣、を、使、し、子、細、ぢ、く、母、と  
 ころ、抱、き、宿、所、より、修、ひ、六、七、日、が、ほど、養、め、う、ら、に、情、心、素、に  
 及、び、東、國、より、源、氏、旧、好、の、家、の、ま、ぢ、且、び、養、ひ、し、る、も、終、り、ま、  
 終、り、中、庸、に、隠、た、る、を、死、い、る、に、幽、め、る、を、ど、内、る、を、  
 けし、と、あ、ら、ま、此、処、を、らん、自、然、死、す、に、於、て、は、此、児、の、ま、我  
 も、罪、を、承、らん、然、と、一、旦、重、能、を、請、え、し、我、今、又、我、手  
 に、懸、り、失、ふ、義、理、に、背、く。つ、る、い、斗、ん、と、公、腑、を、悩、め、る、が、  
 豹、王、丸、誕生、の、初、推、頭、兼、遠、が、妻、乳、味、を、進、せ、た、り、死、み、り、  
 當、り、ぬ、実、豊、の、利、仁、将、軍、の、後、裔、藤、原、姓、の、人、時、勢、に、後、  
 今、平、家、の、土、ま、り、兼、遠、の、信、濃、國、木、曾、山、に、住、し、木、曾

星月夜附録卷上

十一



莫と云拍原八幡の則宮の越八幡宮是なり。流石源家無  
 の流るるありや。冠者や智賢く。武術派練し。猛勇の生益具  
 り。常に平家の奢美四海を傾多。及び一度終る。白旗を翻し。都府攻て。一門の宿敵平家を滅ん。企をあり。然るに治承四年。平家上皇を鳥羽の離宮小狹居。高倉宮をも。遠所へ迂し。令旨汝諸國の源氏に依て。以仁親王。則高倉宮の。兵を起し。令旨汝諸國の源氏に。忽ち令旨汝。當國近國の諸士。汝招。威光を御。

可に列て平家に従ひ居。後家もくと。末属し。不日多勢。推頭兼遠。豫子息親族共を冠者。小。仕。史。惣。以。樋口次郎兼光。次男。今井。四郎兼平。猶子。落合。五郎兼行。林。六郎光明。後田。八郎高光。今月。惟信。曰。次郎。八。惟。後。島。四郎。行。忠。権。六郎。親。忠。根。井。大。弥。子。行。親。手。塚。太。郎。光。盛。大。室。小。室。高。梨。の。面。々。を。宗。徒。と。し。其。外。究。竟。の。勇。士。千。餘。焉。其。中。に。樋。口。今。井。権。根。井。を。木。曾。の。四。天。王。と。稱。す。源。平。盛。衰。記。の。惣。以。今。井。次。男。樋。口。と。も。れ。ども。四。郎。と。云。次。郎。と。云。時。ハ。四。郎。ハ。惣。以。今。井。有。づ。と。ん。又。一。書。う。と。落。合。兼。行。汝。兼。遠。の。三。男。と。ん。今。と。に。取。次。

然るに高倉官の思召立殿も差急の故諸局の於士善到  
 又亦山間小倉官も諸疵を負て薨ぬ頼政々も宇治  
 平等院小引入る生害あり敢て軍散せしむ義仲のまご  
 兼て平氏へ向がれども此上は一手成りて平家を攻傾せしと  
 孫自方を催されりるが今昔成りしる近國運々なる族  
 い由に去を向て攻討る其勢更に敵討族なく小陸道大方其  
 威光も伏せ此旨京六波羅へ告げりる時小権頭兼遠の京都  
 は在りて平宗盛公中三権政を召出さし汝が養ひ並木曾義仲  
 及逆せしむるよし諸由を注をて汝徳と膝し合はるる事  
 今先汝を誅しむる然し義仲を征せんとも有れば兼遠先示と

一、此頃上上の敵勢又ハ子成疑ひ子の父を怪む安悦流言喧く  
 人の心を惑し善民成強るしむん義仲係殺を人止る事更ハ其  
 説を存せんとく後口虚説の向はれん事集が父故義賢を  
 悪源太受平が討たる時二罪ありと同一害せんとはる乳母  
 悲歎れ抱て信死に逝来り命を授けんと切に救はる當座の事  
 怒に牽れ養置家後に並べ召使ひ試るの処生稟癡く物  
 用にも次第一襦袢の裡にも浪人の身なれを息顧の郎等一  
 人もなく其上父ハ義平に討せしむる遠恨ハ頼朝にこそある  
 づれを何の怨もなき平家へ對し争う逆意ありんを  
 双る係殺の忘誕なる所なり其に於て平家多幸の思

皇朝御代御記

一〇







三位中將資盛々。宇治を固免正三位中將重衡々。勢田も向  
 義仲と都へ入ると拒我其間に平家の依り安徳天皇と  
 三種の神器をえたり。西國も落りたり。義仲叡山よ入とゆへ  
 あれ。廿四日上皇叡山も潜幸あり。宇治勢田を破り時  
 義仲上皇を供奉し都へ入時其勢五方とせり。流石二拾餘年  
 栄花を究し。平相國の一門類族一鼓し。西海に退下し。父祖  
 の恥を雪らるる。不世の大功と云つる。八月十六日右馬廐  
 猶院室に依り。西國に向る。頼朝々の代官。蒲冠者  
 範頼九郎冠者義経西人の才上落者。ゆへに京越引  
 回し上らる。翌年此年元暦と改元あり正月十日義仲を征東大將軍。後四

位上行伊予守に任ぜらる。旭將軍と号す。頗朝憲小系。木曾の辺鄙も在り。以前と忘る。頗自大なり。尚も高倉官  
 害も遭ひ。時其王子僧と成り。小國も流落し。あひ。安  
 美仲奉じ。都へ入即位あり。上皇聽召容らる。安  
 徳天皇の才君を天子よとんと。新の族。義仲に反簡して上  
 皇も起し。義仲と討ん。密旨ありと告る。義仲大に怒  
 軍を發し。法住寺殿を攻る。友軍一時に散らる。公々余  
 殞し。暴虐殊も甚し。剽火放し。火炎上じ。義仲勇  
 猛りて。兵を用ると。寡を以て。勝小を帥。大に放向。ハ  
 処敵なり。是迄奇代の大功と云ふ。不學あり。柳也。得る



大逆の跡を残し。竟みハ胡敵の名を汚さるハ惜む所行なり。  
おも東兵死に於て入まると。宇治勢田に備ふ。關東の大軍を防苗  
もれども。九郎心曹子義徑の英智深畧に於て。中ノ義仲の  
相手には。依々木梶原の面々。忽宇治川を渡し。西折れ後ひ  
向ハ諸將宇治勢田を即時に擊破る。依々木曾殿の將士  
潰れ。此所彼方小戦死し。列栗津の方へ落らる。小松原  
道三町餘の処を。並に打。一町あり足取徑迄を。畔付いに急れり。  
石田次郎為久の内々。秩父重忠に頼れ。是非義仲を討せん。  
才方を離れ。敵の後へ。系抜眼を配居。夕日に輝く甲冑  
おハ此人る。んと。大音揚。それへ退る。ハ木曾殿と。又ま。り。某ハ

相摸國の住人石田次郎為久。引返して勝負あれと。鳴る。又。お。は。  
たり。馬。或。返。さん。と。それ。を。畔。狭。く。て。ん。終。日。疲。れ。バ。復。外。  
一。深。田。一。四。蹄。を。棄。陥。し。お。も。あ。れ。を。揚。攻。を。退。谷。む。難。後。の。  
終。を。て。馬。久。弓。箭。を。番。ひ。総。源。一。確。と。射。ら。此。前。義。仲。の。内。  
鹿。一。崑。深。に。射。入。り。る。手。疾。所。か。る。上。急。処。の。痛。も。に。神。心。  
悩。れ。大。到。の。お。る。れ。も。鞍。の。前。痛。小。眉。疵。を。ほ。も。や。虚。伏。る。  
石。田。下。知。を。れ。る。即。後。兩。人。走。来。る。羊。死。羊。生。の。義。仲。を。組。後。首。  
を。揚。秩。父。重。忠。が。陳。一。送。ら。る。今。井。兼。平。ハ。蒲。殿。の。備。も。切。て。入。  
て。義。仲。の。軍。旗。送。殺。し。く。敵。を。討。近。死。敵。を。追。拂。ハ。馬。上。に。立。り。  
旭。務。軍。義。仲。が。四。天王。と。呼。れ。たる。中。原。兼。平。と。君。に。泉。下。に。仕。ん。為。

唯今自害も、以故又届、後代に諸侍とて、唯を御捨三尺  
 寸の太刀を、嘴鞍嵩より、言例み落る也、太刀の尖先後、刺  
 通も、得の叻に、残、人目を愕然と付死せり。今年二十五歳  
 蒲殿の先隊、縮毛三郎重成の、多、首と云、樋口次郎兼光の  
 義仲、幼、入と云、河内、四、新宮、藏、人行家、先生、賢、石川、判、友  
 代と一、才、一、返、逆と企、も、也、此、討、も、と、命、也、と、河、別、向、以、敵、徒  
 を、追、落、一、行、家、の、討、度、し、れ、れ、也、三十六、役、の、首、以、討、を、陳、也、  
 が、義、仲、滅、亡、を、あ、ら、ん、九、条、雅、生、の、あ、ら、ん、兼、大、は、勢、た、ら、ん、義、経、縁  
 と、是、を、知、其、英、名、を、惜、助、ん、為、前、う、と、し、も、功、徳、み、人、致、討、重、て、  
 是、を、省、ら、ら、ん、也、是、非、な、く、東、軍、に、降、一、が、尚、小、義、仲、幼、小、入、礼、行

あり、一、通、鱗、も、依、り、義、経、の、命、を、討、せ、五、ヶ、條、の、罪、名、以、作、出、せ、れ  
 一、成、義、経、一、々、中、披、直、く、樋、口、が、助、命、を、冀、も、と、之、は、法、住、る、殿  
 と、攻、も、も、放、火、乱、妨、女、官、ま、の、怨、深、く、院、中、以、の、外、不、首、尾、の、故、六、条  
 河、原、に、斬、罪、ぞ、と、り、も、木、曾、殿、の、亡、軀、以、所、の、田、主、より、粟、津、原  
 の、叢、莽、み、瘞、葬、し、一、印、を、建、置、し、が、後、寺、以、経、管、今、河、別、粟、津  
 義、仲、寺、と、云、是、也、佛、塔、中、奥、の、祖、と、る、芭、蕉、三、羽、桃、青、大、阪、小、在、て  
 没、し、送、言、に、依、り、義、仲、寺、木、曾、殿、の、墓、迫、く、葬、り  
 木、曾、殿、と、う、ら、あ、ら、ん、也、の、寒、さ、り、也  
 是、能、人、の、知、妙、あり、又、當、寺、小、芭、蕉、門、三、十六、孝、の、肖、像、も、後、  
 句、残、也、と、る、所、冊、の、摺、り、の、あり、乞、人、あ、れ、を、出、し、附、と、し、之、り、或、説、小

義仲死の時木曾に残されし小兒あり山深く隠し置しが成人  
 旭三郎義基と名乗血脈連綿し木曾元馬頭義昌  
 至義仲の九代と源左郎豊方と云木曾の福島に龍源山長福寺  
 と云禅刹あり京花園妙公寺末末。岡山竺隱和尚は豊方の創  
 建する処之豊方のもと。式部少輔信通と云上と曰呀系松山興  
 禅寺と云は是も曰末末。岡山大教和尚是嘉吉年中信通の  
 建立。義仲并家後四天王の肖像三幅大夫房光明の書一幅  
 其外什物有。信通の子は右京大夫親豊と云信功次原沢の西  
 口に淨戒山定徳禅寺あり是ハ親豊の本願みく寺号ハ戒名  
 なり。親豊の墓并肖像あり。親豊の子元京大夫義元の肖像元

京大夫義清寄附の太鼓あり。義元の子と云京大夫義在といふ  
 其子と肥前と義康と云信功次原沢福島の西に城を築移  
 甲列の武田信玄誓を結び秘を備し。木曾の家ハ八幡左郎  
 嫡家の脈武田ハ新羅三郎弑祖と云。慶流よりと云。親  
 玄秋有し。その子ハ義康永禄八年五拾二歳より卒去其子より元  
 馬政義昌と信玄没後甲陽と際あり。その子ハ合戦に在るが如く  
 明りハ血脈を相續し。慶流よりと云。義基並子ハ代祖ハ義仲ハ八代  
 元京大夫家方の三男と野路里右馬助家光と云。今木曾  
 格小野尻の沢と云ハ此人の住し。是ハ其の代祖の慶流よりと云。其の  
 子ハ徳さむと云。木曾修し其古蹟と云。其の子ハ諸野小野

又福鳥宿上田村の西に権次兼遠樋口兼光の宅趾あり宮  
我次の南に兼光館の趾と云也又我次の東に今井兼平が館の  
地有今井が城跡山城の趾悉く存り

星月夜頭晦録六編附録上 終



